

隨泉寺寺報

平成 24 年 (2012 年) 9 月号 第 505 号

TEL 082-892-0217 <http://www.zuisenji.com/>

浄土真宗本願寺派 高峯山隨泉寺

秋季彼岸会法座

講師 浄福寺住職 山下 義円師

講題 『愛山護法』

■ 昼の月

昼の月を見ると 母を思う

こちらが忘れていても

ちゃんと見守っていて下さる 母を思う

かすかであるがゆえに

かえって心にしみる 昼の月よ 『坂村真民 一日一言』より

街を歩いているときに、ふと空を見上げて、白く透けるような月を見るたびにこの詩と、そして母のことが思い浮かびます。

手紙が好きだった母は、何かにつけてよく手紙をくれました。そのくせ私はほとんどといわれるくらい手紙を書きませんでした。しかし落ち込んだときとか、困ったときほど不思議なくらい手紙をくれました。どこかでみているのだろうかと思えるくらい……。いまでも時々出して読んでいます。眼にするたびに母の優しさを感じています。たとえこちらが忘れていても、いつもちゃんと見守っていてくれる存在。仏様も同じようだと思います。

9月の法座予定

- 9月 2日 上棟式 本部役員会
- 9月 9日 掃除 望みが丘
- 9月 15日 朝席午前10時より 主婦の集い おとき
- 9月 15日 昼席午後1時より 秋季彼岸会法座
- 10月 2日 午後6時より 本部役員会
- 12月 24日 午後7時より 披露宴準備



☆研修旅行 市木浄泉寺・江津浄光寺・桜江町福泉寺・

「水の国 松林宗恵映画記念館」 11月15日(木)

研修旅行を開催いたします。今年は島根に行きます。

市木の浄泉寺は、かつては門下に三十三ヶ寺を抱える山陰きっての真宗の名刹の一つ。江戸時代に著名な真宗学僧である仰誓・履善親子が請われて入寺し、学寮を作って自謙や誓鑑などの勝れた学者を多く育て、その学系が特に石州学派と呼ばれたことで知られている。

前任職の朝枝善照先生は、私が学生の頃、龍谷大学で仏教史を講じられ、短期大学学部長等の役職を歴任されました。

特に妙好人伝の研究に力を入れられました。日本ペンクラブ会員で、種田山頭火の研究者としても知られています。2007年膵臓癌のため62歳で逝去されました。



江津の浄光寺の開基住職釈慶念は、慶長2年(1597)に豊臣秀吉の命を受け、従軍医僧として朝鮮出兵に従う。戦争の悲惨を目撃した慶念は、無常転変の儚さを悟り、帰国後、いのちがけの開教に従事。石西一円に教線を張り、現在の石見地方のご法義繁昌の基礎を創りあげる。本願寺より阿弥陀如来尊像が下付(慶長11年2月21日)され、現在の地に一字が建立

されたのは慶長11年(1606)春のことである。石見の妙好人善太郎同行の師匠寺である。境内には、善太郎同行の墓並びに等身大の銅像。記念室には木像、手記、遺品が数多く展示してある。

桜江町の福泉寺と映画監督 松林宗恵は1920年7月7日 島根県江津市桜江町(元邑智郡桜江町)の浄土真宗の寺の五男に生まれる。中学は広島新庄中学に入学、二年生から広陵中学(現・広陵高校)に転校し広島市へ出た。1938年卒業後京都へ進み龍谷大学から日本大学芸術学部に移り、在学中に映画に仏心を注入したいと考え東宝撮影所の助監部に入る。戦後復員して東宝に復職。その後、東宝争議に際し、渡辺邦男、斎藤寅次郎らに従って新東宝に移った。



1952年に上原謙主演の『東京のえくぼ』で初監督。以降は、森繁久彌主演の『社長シリーズ』をはじめとする喜劇や『連合艦隊』をはじめとする戦争映画など、多岐にわたる68本の劇映画を監督した。2004年3月には、故郷である江津市桜江町の「水の国/ミュージアム104」内に、「松林宗恵映画記念館」がオープンした。

☆主婦の集い 9月15日(土) 午前10時～

今回の御講師は岡山県成羽町の浄福寺の住職 山下義円師です。山下先生は本願寺の布教団の副団長の有名な先生です。とても解りやすくユーモアを交えてお話くださいます。楽しみに誘い合わせてお参り下さい。

9月

最高に不思議な「いのち」

それが今ここにある

「近頃、大評判の名高いお坊さまが、御祈祷によって、多くの皆さんの災難を救っておいでになります。一度、御祈祷をお願いしてみられてはいかがですか」と、勧めてくださった方がありました。「ご親切、まことにありがとうございますが、阿弥陀さまは、こちらが、一心こめてお願いしなかったら、私どものことを気にかけてくださる如来さまではないのです。拝まない先から、拝まない者も、おがんでいてくださるのです。拝まないときも、おがんでいてくださるのです。祈ら 者も、祈ら ときも、如来さまの方から、祈ってくださっているのです」といって、帰っていただきました。このことについて、思い出すことがあります。

真夜中、けたたましい、電話のベルが鳴りました。こんな夜中にどなた・・・と、大急ぎで電話台のところにかけて、受話器をとりました。もう、一刻の猶予もなら という感じの、聞き覚えのない、若い男の人の声が響いてきました。

「まわり中のみんなが、裏切り、逆き、見放し、生きる気力を失いました。それで、今から、首を吊ろうと思うのですが、ちょっと気にかかることかありまして・・・。

『南無阿弥陀仏』と称えて首を吊ったら、まちがいなく、仏さまの国へ往けるんでしょうね」というのです。私は、思わず、どなりつけました。

「ダメです。やめときなさい。あなたのこしらえものの『南無阿弥陀仏』なんか屁のつっぱりにもなるもの

ですか」と。

これは、意外！ という感じの弱々しい声で、「では、どうすればいいのですか？」 「どうすればいいかって。あなたは、まわり中のみんなが、裏切り、逆き、見放した、とおっしゃる。まわり中のみんなどころか、かんじんのあなた自身、いま、あなたを見放そうとしているではないか。その、あなたまでが見放そうとしているあなたを、なお、見放すことができなくて『つらいだろうが、どうかもういっぺん考え直して、しっかり生きておくれ』と、必死になって叫んでいらっしやる方のお声が、あなたには、聞こえないのか？」 「どこにも、そんな声なんか・・・」 「何をいっているのか、いま、あなたは激しく、こちらまで響いてくるような音をたてて呼吸しているではないか。その呼吸が、ホラ、今も、『どうか考え直して生き直しておくれ！』と、叫んでいるではないか。あなたの胸のドキドキが、『死なせてなるものか！』と、激しく叫んでいるではないか。それが、ほんとうの「南無阿弥陀仏さまのお声」なのです。この、ほんとうの『南無阿弥陀仏』にであわなかったら、生きても、死んでも、あなたの人生は、空しいのです」と、申しましたら。「何だか、



たいへんな考えちがいをしていたようです」と、電話が切れました。その声の響きから、自殺はやめにしてもらえたと確信できましたので、私も、ホッと、床についたことでした。

☆ 8月12日（日）庫裏増改築事業起工式

11日の大雨で外でできるかどうか心配していましたが、朝から好天気になり、暑さが戻ってきました。しかし、起工式をする予定の場所が、客殿予定地の庭の宅地として造成した場所だったので、あいにく前日の雨で かるんで上がれませんでした。急遽庫裏の前で行いました。たくさんの人が出席してくださり、尊いご縁でした。

仏式の起工式は、さまざまな人々のお陰様をもって、建築の運びとなったご縁をお互い喜び合い、これを仏さまに感謝するとともに、自ら責任をもって工事に取り組もうと襟を正し、この建物が安全にそしてしっかりしたものにすることを仏前に誓う儀式です。

起工式表白

敬って 大慈大悲の阿弥陀如来の御前に申し上げます。

高峰山随泉寺は、仏祖の加護のもと、奥島設計事務所様、有限会社奥島建設様、並びに有縁の方々の協力を得て、庫裏増改築並びに客殿新築工事を行うこととなり、本日にここに起工式を厳修いたします。



そもそも、庫裏は仏教の開祖であるお釈迦様が御入滅の後、お釈迦様を敬う信者たちが、仏塔を建てて仏舍利を安置し、崇敬のまことを捧げるために集う坊舎に起源いたします。

浄土真宗においては、宗祖親鸞聖人御往生の後、遺弟たちが集まって、ご遺骨を納めて墓標を立て、また廟堂を建立して、聖人の恩徳を鑽仰し、南無阿弥陀仏のみ教をいただく心の拠りどころとした庫裏・内仏に

始まります。

この流れを汲む随泉寺の『庫裏・客殿』は門信徒子々孫々に至るまで、新たな尊き御堂となります。

本日起工式を迎えて後、引き続き、阿弥陀如来の慈悲の光に護られ、諸仏・菩薩の護持を賜りつつ、一同が心を合わせて、工事がさらにつつがなく進み、めでたく完成の日を迎えますことを、随泉寺住職 釋哲成 謹んで申し上げます。

平成24年8月12日

浄土真宗本願寺派高峯山 随泉寺 第16世住職 釋哲成